

2013年3月

1 α を 0 でない実数とし, 0 でない実数からなる数列 $\{a_n\}_{n=1}^{\infty}$ が

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{\sin a_n}{a_n} = \alpha$$

をみたすとする.

- (1) 数列 $\{a_n\}_{n=1}^{\infty}$ は有界であることを示せ.
- (2) $\alpha = 1$ のとき, 数列 $\{a_n\}_{n=1}^{\infty}$ は収束することを示し, $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n$ を求めよ.

2

- (1) 正定数 c に対して, 関数 $f_c: (-\pi, \pi) \rightarrow \left(-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}\right)$ を

$$f_c(x) = \arctan(c \tan \frac{x}{2})$$

により定める. このとき, 導関数 $f'_c(x)$ を $\cos x$ により表せ.

- (2) 定数 $\alpha > 1$ に対して, 次の等式を証明せよ.

$$\int_0^{\pi} \frac{dx}{\alpha + \cos x} = \frac{\pi}{\sqrt{\alpha^2 - 1}}.$$

- (3) 定数 $\alpha > 1$ に対して, 次の積分値を求めよ.

$$\int_0^{\pi} \frac{dx}{(\alpha + \cos x)^2}.$$

3 $M_4(\mathbb{R})$ を 4 次実正方行列全体のなすベクトル空間とする.

- (1) a, b を実数とするとき, 行列

$$A = \begin{pmatrix} a & 0 & 0 & b \\ 0 & a & b & 0 \\ 0 & b & a & 0 \\ b & 0 & 0 & a \end{pmatrix}$$

の行列式 $|A|$ を求めよ.

(2) $M_4(\mathbb{R})$ の部分集合

$$W = \left\{ A = \begin{pmatrix} a & 0 & 0 & b \\ 0 & a & b & 0 \\ 0 & b & a & 0 \\ b & 0 & 0 & a \end{pmatrix} \mid a, b \in \mathbb{R}, |A| = 0 \right\}$$

が $M_4(\mathbb{R})$ の部分ベクトル空間であるかどうかを、理由と共に答えよ.

(3) 次の2つの4次正方行列が \mathbb{R} 上一次独立であることを示せ.

$$B_1 = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad B_2 = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & -1 & 0 \\ 0 & -1 & 1 & 0 \\ -1 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}.$$

(4) 前問で与えられた行列 B_1, B_2 で張られる $M_4(\mathbb{R})$ の部分ベクトル空間に属する任意の行列 B について、 $|B| \geq 0$ であることを示せ.

4 n 次元実ベクトル空間 \mathbb{R}^n における通常の内積を $\mathbf{u} \cdot \mathbf{v}$ で表すとし、 $\{\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \dots, \mathbf{e}_n\}$ を \mathbb{R}^n の正規直交基底とする. $\mathbf{f} = \sum_{i=1}^n \mathbf{e}_i$ とし、

$$W = \{\mathbf{v} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{v} \cdot \mathbf{f} = 0\}$$

とする. さらに、 \mathbb{R}^n の $\mathbf{0}$ でないベクトル \mathbf{a} に対して、写像 $r_{\mathbf{a}}: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ を

$$r_{\mathbf{a}}(\mathbf{x}) = \mathbf{x} - 2 \frac{\mathbf{a} \cdot \mathbf{x}}{\mathbf{a} \cdot \mathbf{a}} \mathbf{a}$$

で定義する.

(1) W が \mathbb{R}^n の部分ベクトル空間であることを証明せよ.

(2) $r_{\mathbf{a}}$ が線形写像であることを証明せよ.

(3) $\{\mathbf{e}_1 - \mathbf{e}_2, \mathbf{e}_2 - \mathbf{e}_3, \dots, \mathbf{e}_{n-1} - \mathbf{e}_n\}$ が W の基底となることを証明せよ.

(4) W に属する $\mathbf{0}$ でないベクトル \mathbf{a} に対して、 $r_{\mathbf{a}}(W) = W$ を証明せよ.

(5) $n = 4$ の場合に、 W の基底 $\{\mathbf{e}_1 - \mathbf{e}_2, \mathbf{e}_2 - \mathbf{e}_3, \mathbf{e}_3 - \mathbf{e}_4\}$ に関する $r_{\mathbf{e}_2 - \mathbf{e}_3}$ の表現行列を求めよ.

5

n を正の整数とし, $F = \{0, 1\}$ とする. 写像 $d: F^n \times F^n \rightarrow \mathbb{Z}$ を

$$d(\mathbf{u}, \mathbf{v}) = \left| \{i \mid 1 \leq i \leq n, u_i \neq v_i\} \right|$$

で定義する. ここで, $\mathbf{u} = (u_1, u_2, \dots, u_n) \in F^n$, $\mathbf{v} = (v_1, v_2, \dots, v_n) \in F^n$ であり, $|S|$ は有限集合 S の要素の個数を表す. さらに, $0 \leq k \leq n$ をみたす整数 k と $\mathbf{u} \in F^n$ に対して

$$N_k(\mathbf{u}) = \{\mathbf{v} \in F^n \mid d(\mathbf{u}, \mathbf{v}) = k\}$$

とおく.

- (1) k は $1 \leq k \leq n$ をみたす整数とし, $\mathbf{u}, \mathbf{v} \in F^n$ は $d(\mathbf{u}, \mathbf{v}) = k$ をみたすとするとき, $|N_{k-1}(\mathbf{u}) \cap N_1(\mathbf{v})|$ を求めよ.
- (2) i, j は $0 \leq i \leq n, 0 \leq j \leq n$ をみたす整数とし, $\mathbf{u}, \mathbf{v} \in F^n$ とする. $d(\mathbf{u}, \mathbf{v}) = k$ とするとき, $|N_i(\mathbf{u}) \cap N_j(\mathbf{v})|$ を求めよ.
- (3) i, j は $0 \leq i < j \leq n$ をみたす整数とし, $\mathbf{u}, \mathbf{v} \in F^n$ とする. 任意の $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in N_i(\mathbf{u}) \cap N_j(\mathbf{v})$ に対して $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) < 2j$ が成り立つことを示せ.

6

2つの確率変数 X, Y の共分散は

$$\mathbf{Cov}(X, Y) = \mathbf{E}[(X - \mathbf{E}[X])(Y - \mathbf{E}[Y])]$$

で定義される. ただし, $\mathbf{E}[Z]$ は確率変数 Z の平均値を表す. 以下の問いに答えよ.

- (1) 確率変数 X, Y が独立であるとき, $\mathbf{Cov}(X, Y) = 0$ となることを示せ.
- (2) 確率変数 X, Y のとる値が 0 または 1 に限られているとする. このとき, $\mathbf{Cov}(X, Y) = 0$ であれば, X, Y は独立であることを示せ.
- (3) 確率変数 X, Y のとる値が $-1, 0$ または 1 に限られているとし, $\mathbf{E}[X] = \mathbf{E}[Y] = \mathbf{Cov}(X, Y) = 0$ とする. このとき, X, Y は独立であるかどうかを理由と共に答えよ.

7 $\gamma(t)$ を \mathbb{R} 上の実数値連続関数とする. 微分方程式

$$\frac{d^2x}{dt^2} + \gamma(t)x = 0$$

の解 $x = x(t)$ について以下の問いに答えよ.

- (1) $\gamma(t)$ が非正値の定数関数のとき, 条件 $x(0) = x(1) = 0$ を満たす解 $x(t)$ は恒等的に 0 であることを示せ.
- (2) $\gamma(t)$ が正値の定数関数のとき, 条件 $x(0) = x(1) = 0$ を満たす恒等的に 0 でない解 $x(t)$ を求めよ.
- (3) $\gamma(t)$ が正値関数のとき, 条件 $x(t+1) = 4x(t)$ を満たす解 $x(t)$ は $[0, 1]$ において少なくとも 1 点で 0 になることを示せ.

8 複素平面上の有理型関数

$$f(z) = \frac{z}{(z^2 + 4)(z^2 - 2z + 10)}$$

について以下の問いに答えよ.

- (1) $f(z)$ のすべての極とその点における留数を求めよ.
- (2) 正数 R に対し, C_R を半円周 $z = Re^{i\theta}$, $0 \leq \theta \leq \pi$ とする. 複素積分

$$I_R = \int_{C_R} f(z) dz$$

は, $R \rightarrow +\infty$ のとき, 0 に収束することを示せ.

- (3) 定積分

$$\int_{-\infty}^{\infty} \frac{x}{(x^2 + 4)(x^2 - 2x + 10)} dx$$

の値を求めよ.

9 a, b, c, d を実数とし, $a < b, c < d$ とする.

- (1) 开区間 (a, b) と \mathbb{R} は同相であることを示せ.

(2) 閉区間 $[a, b]$ と \mathbb{R} は同相でないことを示せ.

(3) 开区間 (a, b) と区間 $[c, d) = \{x \in \mathbb{R} \mid c \leq x < d\}$ は同相でないことを示せ.

10 G を有限群, A を G の正規部分群, z を G の位数 2 の元とし, 次を満たすとする.

$$C_G(z) \cap A = \{e\}.$$

ただし, e は G の単位元であり, $C_G(z) = \{g \in G \mid gz = zg\}$ である.

(1) A の位数 $|A|$ が奇数であることを証明せよ.

(2) $\{x^z x^{-1} \mid x \in A\} = A$ を証明せよ. ただし, $x^z = z^{-1} x z$ とする.

(3) A がアーベル群であることを証明せよ.